

子が語る戦中戦後の時代(後編)

緑町 今野 強

小学校入学まで

住まいは木造2階建てアパートで、東京都板橋区志村本蓮沼町331番地にある紫勲荘(しくんそう)でした。L字型の長い廊下に面して左右に4畳半の部屋が並び、台所や便所は共同で1階2階合わせてそこに10数世帯ほどが暮らしていました。私たちは北向きの道に面した2階の部屋でした。父はラジオの修理屋でした。

住人は、闇屋、屑屋、ばくち打ち、お妾さん、進駐軍勤め、元力士、紙芝居屋、本屋、米兵相手の女性など、様々な方たちでした。闇屋は文字通り闇米売り、屑屋は焼け跡を廻って物を集めてくる。盗んでくる物も相当あったようで、よく警官が来ていました。それでも住人たちは、寄り添うように支え合うように生きていたように思います。特に子どもにはそれなりに優しくしてくれた人がいました。

部屋が博打場になって外部から人が集まっていました。争いが起きての、時には短刀をかざしての立ち回りがあり、怖い場面には何度も遭遇しました。そんな時には部屋の出入り口につっかい棒をして震えていました。時には乱闘が道で行なわれて、2階からよく見えたものです。

空腹の思い出は今でも覚えています。とにかく食糧難でいつでも空腹なのです。母が言うには私と父とが食べ物の取り合いをしたそうで、父の言い分は「俺は働かねばならない。そのためには食べなければならない」。なるほどではありますが、今思えば父性と母性の違いのように思います。そのことで父母はよくケンカをしたそうです。

アメリカの援助の大豆粉やトウモロコシ粉が配られましたが、この上なく不味い。アメリカでは家畜の飼料だったようです。

当時は暮らしの周りに色彩感が乏しかったのですが、アパートの一部屋にはリンゴ箱と行李(こうり)がいくつかあり、行李の中には母が結婚時に持ってきた着物

や帯が入っていて、それは眩しかったものでした。

母はよくそれを出して風呂敷に包んで出かけ、帰りにはさつま芋を持って帰ってきました。それはとてもうまかったのですが、幼いながらに「自分が空腹を訴えなければ着物はなくならないで済むのか」と思ったものでした。

母は身を切るような思いで求めたさつま芋をふかし、アパート内のよその子どもも部屋に呼んであげていました。子ども一人の我が家のひもじさは、母が思うにはまだましだったのです。

赤い石のカケラのようなブドウ糖というものが配給されました。リンゴ箱の食卓の上でブドウ糖を包丁で削り、それを湯に溶かして飲んだ砂糖湯は、とにかく美味しいものでした。この世のものとは思えないほどでした。貧しくとも父母3人での幸せなひとときでした。

命を救ってくれた父母の実家

父母の実家は秋田県。父は花火で有名な大曲近くの雄物川沿いの南檜岡村、母は羽後境という駅からの15キロを徒歩で行くしかない河辺郡船岡村庄内にある農家でした。この実家が戦中戦後の食糧難の時に、その家から出た者たちの命をどれだけ救ってくれたかわかりません。

実家のやさしさと共に、実家にまつわる戦争の悲劇を述べさせていただきます。

秋田の実家に行って米の飯を食べ、帰りに米をもらってくるのがその頃の一番よろこびでしたが、切符を買うのが大変でした。上野駅に母と共に二日も三日も並んだといいます。駅周辺には戦災孤児がたくさんいました。みんな飢えていて物乞いをしていました。孤児狩り、浮浪者狩りが行なわれていて、その場面を何度も見ました。復員した傷痍軍人の物乞いの姿は幼ながらに本当に痛々しさを感じたものでした。



発見！市民活動フェア

九条の会さかども出展しています！

日時 3月10日(土)10時～15時(途中からでも！途中まででも！)

会場 入西地域交流センター(九条の会さかどブースは2階です)

市民活動やボランティア活動をしている活発な皆さんが参加する市役所のイベントで、坂戸市民と9条について語りあえる貴重な機会にご参加を！

やっとの思いで秋田へ着くと、そこは天国でした。多少肩身の狭い思いはしたようですが、実家の誰もがみな優しく、『火垂るの墓』のような意地悪など全くありませんでした。飢えた体を思いきり癒して、帰りには米をもらったものです。

しかし、沢山はもらえません。帰りの列車で闇米の摘発で奪われてしまうからです。母は着物の中や帯に、幼い私も袴纏の背中に袋を縫い付け、そこに米を入れてもらいました。重くてそっくり帰って歩いたといいます。痩せた母も私もかなり太って見えて、見抜かれたら大変と実家の皆が心配したといいます。

上りの東北線の列車が荒川鉄橋を渡る前後で臨時停車させられて一斉検問、列車内にサーベルをガチャガチャさせた警官が乗り込んできます。その前に列車から飛び降りて逃げる闇屋さんたちが、捕らえられ米を奪われます。挙句の果てに連行までされる姿、こういう場面に何度か出会いました。

警官も人の子、怪しいと思われつつも母と私は何度も見逃されました。父が実家に行って同じように米を身に付けると、没収されて情けない顔で帰ってきたものです。奪った米はどうなるのかなあなんて、子どもながらに考えもしました。

〇〇〇〇ガールと囃し立て

米兵を相手に体を売る女たちが出現しました。彼女たちは米兵から甘味品などをもらいますので、クッキーやチョコレートなどをよく持っていました。くれと言ってもくれないと、うらやましさに妬ましさも合わさって囃し立てるのでした。「バカカバチンドン屋お前の姉ちゃん(母ちゃん)〇〇〇〇ガール」そのうちに言われた子は泣き出すのです。今でも残酷なことをしたものだ胸が痛みます。

屑屋さんの仕事は、麻袋に棒計りだけで成り立つようでした。戦後のどさくさだから泥棒まがいのこともしていたのでしょう。よく警官がアパートに来ていました。連行される場面も見ることがあります。

母の実家の悲劇

母は1917年(大正6年)11月生まれ、今年100歳。4歳上の兄は、1945年(昭和20)年10月19日に中支の野戦病院で没しました。2歳下の弟は、1944年5月25日ビルマのインパール作戦で没しました。母は弟が、横須賀から出港する際に私を背負って見送りに行き私を抱かせたといいます。

私は全く覚えていませんが、涙を流して喜んでくれたといいます。二人とも「遺骨箱に遺品なし」だったそうです。兄の嫁は出征後の1944年7月に、兄との間の長女を出産しました。

仕方なく兄嫁は、1921年(大正10年)生まれの弟と1950年(昭和25年)に再婚しました。すぐに長女が、3年後に次女が生まれました。この5歳違いの姉妹が今になっても不仲で絶交状態です。

兄と弟の妻となったおばさんの苦悩はいかばかりだったでしょう。戦死したはずの夫が生きていたらどう

しよう…と、こういう不安がどれだけ大変だったことでしょうか。

父の実家の悲劇

父の3歳上の長兄の孝一は中国戦線で手首を負傷しました。4歳下の弟の正夫はシベリアに抑留されました。抑留生活で心臓を傷め、復員後もその治療に苦労しました。村相撲で大関を張った丈夫な人でしたが、力仕事ができないで小さな商店を営っていました。

正夫さんがシベリアから実家に送ってきたはがきには、内地と実家の皆を心配して、自分がいつの日か帰って皆を救うからそれまで頑張ってくださいとありました。検閲があったからかもしれませんが、自らの辛さを一言も書いていません。涙ぐましいものでした。

切ない屋号「勝った家」

兄が復員して帰ってきましたが、残した兄の嫁と家に残った弟がデキていました。復員後に兄弟の争いが始まりました。近所の者たちは外で兄弟の立ち回りが始まると「月岡劇場(大曲にあった芝居小屋)が始まった」と見物したといいます。力の強い弟にいつも負けていた兄は、首つり自殺をしました。弟の家は、しばらく「勝った家」と呼ばれていたといいます。なんとも切ない屋号でした。

原っぱ・焼け跡・民主主義

北区、板橋区にまたがる広大な東京兵器補給廠地区には、通称「兵器廠(しょう)」と呼ばれる空襲でやられた広大な焼け跡がありました。子どもらの格好の遊び場でもありました。町には中学生を頭として下は4歳～5歳くらいの男子のグループが作られました。今思うと『ウエストサイド物語』の「ジェット団」の子ども版の様ですが、集まると何をするのかを一応民主的に討議をして決めるのでした。私の入っていたのはイサオちゃんという中学生が兄貴分でした。

金持ちの家の風呂沸かしや庭の掃除などの仕事をして小遣いをもらって分配し、駄菓子屋に行ってアンコ玉などを買うのですが、ひとしおのうまさでした。

焼け跡でセックスをする米兵の安全を守る見張りのようなことをして小遣いをもらうこともありました。拾ったコンドームは破れないでいくらでも膨らむものですから、面白がって膨らませて持って歩いてひんしゆくを買ったことも度々でした。

朝鮮戦争時には、空地に杭を立てて回してある針金を盗んでくると売れました。見張り役、針金のはがし役、売り役などそれなりに決めて実行して成功すると心が躍ったものでした。

「安倍9条改憲NO！」署名を！

お配りした署名用紙は、4月20日(金曜日)までに、運営委員に届けるか、「〒350-0224 坂戸市山田町10-53 小林忠夫」宛てに、ご郵送をお願いします。

今後の運営委員会(会員なら誰でも参加できます)

3月22日、4月26日、5月24日(第4木曜日10時～12時)会場は、北坂戸駅東口の坂戸市文化施設オルモ1階。